

# 筑後市内遺跡群Ⅻ

福岡県筑後市大字熊野所在遺跡の調査  
筑後市文化財調査報告書  
第95集

平成22年(2010)

筑後市教育委員会

くまのやしき  
熊野屋敷遺跡(第3次調査)

くまのやしき  
熊野屋敷遺跡(第4次調査)

平成22年(2010)

筑後市教育委員会

## 序

熊野屋敷遺跡は、松原校区に位置し、天台寺院である坂東寺や熊野神社を中心とした伝統ある地域に存在します。

今回の調査は、最澄開基と伝えられ、1000年以上の歴史を誇ると考えられている坂東寺の境内で行った埋蔵文化財発掘調査であります。

調査からは中世を中心とした遺構・遺物が確認され、坂東寺の歴史を裏付ける貴重な発見となりました。

歴史を顧み、先人たちの技術や知恵を学び得ることは、現代人である我々が現在の生活に役立てることは勿論、希望ある未来へ伝え残さなければならない責務でもあります。

本報告にあたり、坂東寺並びに関係者各位に文化財へのご理解、ご協力を賜った事を深く感謝申し上げます。

平成22年3月

筑後市教育委員会  
教育長 城戸 一男

## 例言

1. 本書は平成20年度に筑後市教育委員会が国庫補助事業として行った熊野屋敷遺跡第3次調査、平成21年度に行った熊野屋敷遺跡第4次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。出土遺物、図面、写真等は筑後市教育委員会で收藏、保管している。発掘調査及び整理作業の関係者は第1章に記している。
3. 本書に使用した図面の遺構図は熊野屋敷遺跡第3次調査を上村英士、熊野屋敷遺跡第4次調査を小林勇作、上村が作成し、遺物の実測、浄書を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに業務委託し、遺構の浄書は横井理絵が行った。なお、業務委託に関するの監理及び管理は筑後市教育委員会が行った。
4. 本書に使用した遺構写真撮影は上村・小林が行い、遺物の写真撮影は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに業務委託した。
5. 今回の調査に用いた測量座標は日本測地系第2座標系を基準としている。
6. 本書に使用した遺構の表示は以下の略号による（筑後市における埋蔵文化財の取り扱いについて：2002に準拠している）。  
SD - 溝 SK - 土壇 SP - ピット SX - 不明遺構  
また、本文中の出土遺物について○×○の表記は両方の可能性が考えられるという意味である。
7. 本書の執筆はⅢ. 調査成果 熊野屋敷遺跡第3次を上村、熊野屋敷遺跡第4次を小林が行い、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの執筆及び編集は上村が行った。

## 目次

Ⅰ. 調査経過と組織	1
Ⅱ. 位置と環境	2
Ⅲ. 調査成果	3
(熊野屋敷遺跡第3次調査)	4
(熊野屋敷遺跡第4次調査)	19
Ⅳ. 考察	31

写真図版

## I . 調査経過と組織

熊野屋敷遺跡第3次調査は筑後市大字熊野字屋敷に所在する。平成20年6月に開発原因者である坂東寺住職皆木寂俊氏より庫裏建設による試掘・確認調査依頼が筑後市教育委員会に提出され、担当課である社会教育課文化スポーツ係による現地での試掘調査を実施した。試掘調査の結果、当該地全域で遺構が確認され、開発による埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。当該地の約420㎡について本調査を実施することで合意し、国・県・市の補助事業として調査を行う事となった。

熊野屋敷遺跡第4次調査は筑後市大字熊野字屋敷に所在する。平成21年3月に開発原因者である坂東寺住職皆木寂俊氏より庫裏建替えに伴う敷地造成について試掘・確認調査依頼が筑後市教育委員会に提出され、担当課である社会教育課文化スポーツ係による現地での確認調査を実施した。試掘の結果、当該地全域で遺構が確認され、開発による埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。当該地は堀状の土塁が巡らされている場所であり、造成により土塁が削平される部分について本調査（トレンチ及び平板による調査）を実施することで合意し国・県・市の補助事業として調査を行う事となった。

発掘調査に関わる調査組織は以下のとおりである。

### 1) 平成20年度

総括	教育長	城戸 一男
	社会教育部長	田中 僚一
	社会教育課長	永松 三夫
	文化スポーツ係長	田中 純彦
	文化スポーツ係	永見 秀徳
	(文化財担当職員)	小林 勇作
		上村 英士 (確認・本調査担当)
		吉村 由美子 (囑託)

### 2) 平成21年度

総括	教育長	城戸 一男
	協働推進部長	田中 僚一
	社会教育課長	山口 辰樹
	社会教育係係長	田中 純彦
	(文化財担当職員)	小林 勇作 (確認・本調査担当)
		上村 英士
		吉村 由美子 (囑託)

### 3) 発掘調査・整理作業参加者

中村 富男、田平 利彦、下川 義文、本村 弘年、田島 ヤス子、堤 義弘、三瀬 美樹子、河添 幸子、隈本 干城、井上 むつ子、加藤 礼子、角 里子、野口 晴香、野間口 靖子、横井 理絵

調査及び整理作業に際しては次の方々にご指導、ご教示を賜った。記して心より感謝申し上げます。(順不同、敬称略)

狭川 真一 (財団法人元興寺文化財研究所)、小田 和利、岸本 圭、齋部 麻矢 (福岡県教育庁)、中島 恒次郎 (太宰府市教育委員会)、立石 真二 (古賀市教育委員会)

## II. 位置と環境

### ・地理的環境

筑後市は福岡県の南西部、筑紫平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は国道に沿って市の中心部に形成されている。

### ・歴史的環境

今回報告する熊野地区は市のほぼ中央に位置し、近年は宅地化が進行し市街化している地域である。坂東寺は延暦年間、最澄開基という伝説を持ち、本尊は薬師如来である。

#### (文献史料)

文献資料での坂東寺は、延応元年(1239年)十月二十日の熊野神社鳥居立注文写に「大工坂東寺住人藤四郎」と見えるものが初見である。ただし、この「坂東寺」は寺号か地名かは判断できない。寺号としては天福二年(1234年)二月の広川荘名田所役注文写に「舎坊地七拾四ヶ所 神宮寺 安福寺 二十二ヶ所 坂東寺 広福寺 五十二ヶ所」と見えるのが確実な初見である。

坂東寺の成立については諸説あるが、保延四年(1138年)に広川荘が熊野社領になった頃、熊野神社が勧請され、神宮寺として創建されたと考えられる説、また、元弘四年(1334年)広川荘々官ら連署状写に「久安三年(1147年)八月若宮王子社造立、元久二年(1205年)七月□日西御前社造立・・・其後建長二年(1250年)御造宮之時、為三社一字一間」とあり、三社一字にした建長二年(1250年)頃を熊野神社の成立と考える説などがある。

また、坂東寺史料としては、明応元年(1492年)に成就院法印信覚が後代のために、以前からの証文などを一巻に書き注した「坂東寺縁起」が残されている。

#### (有形文化財)

坂東寺境内には県指定有形文化財の「坂東寺石造五重塔」がある。凝灰岩で造られ、総高276.6cmである。基壇石の東側面には中央に梵字、左右に仁王像が彫され、西側面には「奉造立五重塔 大勧進□所物 刑部丞中原為明 貞永元年□辰□ 彼岸日」と陰刻されている。貞永元年(1232年)銘は筑後地方では最古の銘をもつものであり、鎌倉時代の様式を伝える石造塔である。

楼門には仁王尊があり、慶長十五年(1610年)に筑後国領主である田中吉政に修理を依頼した記録が残っており、それ以前には存在したものと考えられている。

#### (無形文化財)

現在、熊野神社で行われる県指定無形民俗文化財の「鬼の修正会・追儺祭」は藩政頃まで坂東寺で行われていたもので「坂東寺鬼の修正会」と呼ばれていたものである。起源については、明応二年(1492年)二月成就院法印信覚の法会次第書に「正十日鬼修会」とあり、毎年旧正月十日の年中行事として継承されてきたものである。祭の神事は「小松明」「鬼追い」「大松明」の3つで構成され、「鬼追い」は氏子のみで行われる非公開の神事である。「大松明」は長さ13m、直径1m、重さ500kgの大松明を三本準備し、午後10時に小松明から点火し、大松明を刈又といわれる棒で支えながら綱で社殿を3周引き回し、鬼を追い払い、無病息災と豊作を祈願する伝統行事である。

### 参考文献

- 『筑後市史』第2巻 1995 筑後市
- 『筑後松原郷土史』1988 筑後郷土史研究会
- 『筑後市の文化財』2004 筑後市教育委員会

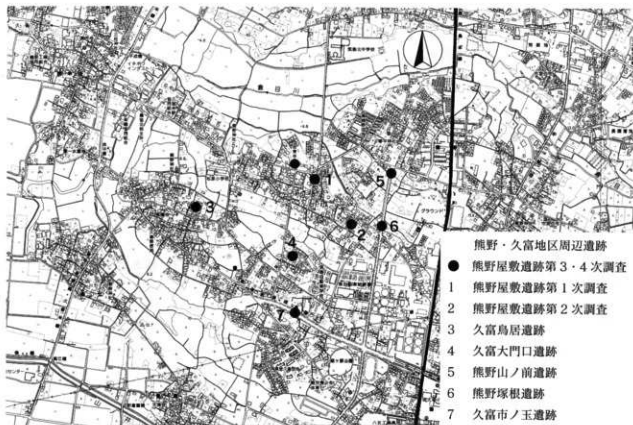


Fig.1 周辺調査地点位置図 (1/20000)



Fig.2 調査地点位置図 (1/5000)

### Ⅲ．調査成果

#### 熊野屋敷遺跡(第3次調査)

##### (1) はじめに

調査は平成20年8月4日から行い、平成20年9月8日に遺跡全体の空中写真撮影終了後に現場引渡しを行った。調査区現況は竹林であり、調査区は庫裏建設部分を設定した。遺構の掘削は表土から遺構面までを(有)徳光建設(代表 橋爪徳光)に委託し、遺構面からは地元作業員による手作業の掘削を行った。



##### (2) 基本土層

層位は、約30cm～50cmの堆積土(竹の根で攪乱されている)下に黄茶色土の地山を確認し、地山に切り込む形で遺構を検出している。遺構は溝、ピット、土壇を確認した。

Fig.3 基本土層模式図

S番号	遺構番号	内容	備考	S番号	遺構番号	内容	備考
1	3SX01	溝×溜り状遺構	小皿多量	34		ピット	
2	3SX02	落ち込み	近現代瓦多量	35		整地層	
3	3SD03	溝		36		ピット	
4		整地層	川原石多量	37		ピット	
5		土壇	火葬骨多い	38		ピット	
6	3SX06	整地層	川原石多量	39		ピット	
7		ピット?		40	3SD40	溝	
8		ピット?		41		ピット	
9		ピット		42		ピット	
10	3SX10	整地?		43		ピット	
11		ピット	近現代瓦多量	44		ピット	
12		ピット	近現代瓦多量	45	3SX45	整地層?	
13		溝?		46		溝	
14		ピット		47		溝	
15		土壇		48		攪乱	
16		ピット		49		攪乱	
17		ピット		50	3SD50	溝	
18		ピット		51		整地層	
19		ピット		52		溝	
20		土壇		53		溝	
21		ピット		54		ピット	S-20内ピット
22		ピット		55	3SK55	経塚	一字一石経
23		ピット		56		ピット	S-20内ピット
24		ピット		57	3SK57	土壇	
25	3SX25	整地層		58		溝	S-52・53下層
26		ピット		59		整地層	
27		ピット		60	3SD60	溝	S-52・53・58
28		ピット		61	3SX61	整地層	
29		ピット		62		ピット	
30		整地層	火葬骨多い	63		ピット	
31		ピット		64		ピット	
32		土壇×ピット		65			
33		土壇?		66		ピット	

Tab.1 遺構番号台帳



### (3) 検出遺構

溝

3SD03 (Fig.4・5、Pla.1)

調査区東端から西へ直線的に延び、調査区中央で緩やかに南へ曲がり調査区内で留まる溝である。埋土上で切り合い関係があり、南端のS-47が当遺構を切っている。埋土の違いから、浚深等が行われていた可能性が考えられる。検出長約21.5m、幅約0.6m、深さは東端で約0.24m、南端で0.08mを測る。遺物は染付皿片、小椀片、陶器蓋片、近世瓦片、石塔片を出土している。

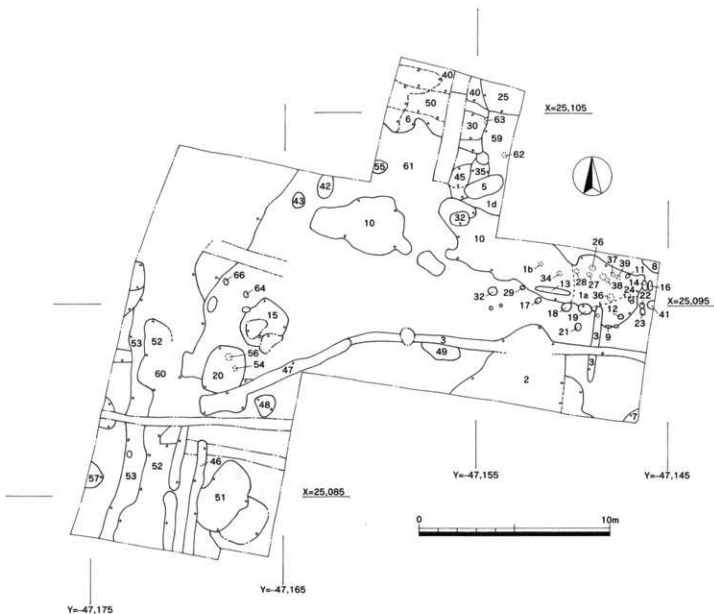


Fig.4 遺構略測図 (1/200)

### 3SD40 (Fig.5・6, Pla.6・7)

調査区北端で検出した北西から南東へ走る溝である。3SD50と平行し、溝の北側立ち上がりは調査区外へ延びると考えられる。検出長約7.0m、幅約1.5m以上、最大深さ約1.12mを測る。溝断面は逆台形で、最深部は一段下がり逆台形状を呈すると考えられる。遺物は東播系須恵器鉢片、土師器小皿片、陶器壺片、平・丸瓦片、石塔片が出土している。尚、この溝は調査区北側に存在する溝状遺構（土塁）と平行しており、現地境界や地形に沿って検出されている。

### 3SD50 (Fig.5・6, Pla.6・7)

3SD40に並行する形で検出したが、途中で留まる溝である。検出長約2.9m、最大幅約1.87m、最大深さ約0.52mを測る。溝断面は緩やかなU字状を呈するが、最深部で一段下がり逆台形を呈する。遺物は土師器小皿片、土鍋片、甕片、竜泉窯系青磁碗片、皿片、染付碗片、陶器甕×壺片、平・丸瓦片、石塔片を出土している。

### 3SD60 (Fig.5・6, Pla.8)

調査区西側に沿って検出した南北に走る溝である（S-52・53・58）。検出長約21m、幅3.8m以上、最大深さ約1.6mを測る。溝は浅深を繰り返しており、最深部は一段下がり、断面は逆台形を呈する。遺物は土師器小皿片、片口鉢片、坏片、椀片、陶器片、粘土塊、平・丸瓦片が出土している。

## 経塚

### 3SK55 (Fig.7, Pla.9～14)

調査区北側で検出した一字一石経塚である。当初調査区では1/4程度の検出であったが、一字一石経が土壌に詰められており、原因者である坂東寺住職菅木寂俊氏より、調査区を拡張し経塚全体を調査する了解が得られたため、遺構全体を検出した。平面形態は長方形で、長軸約2.25m、幅約1.5m、深さ約0.61mを測る。内部から計68487個の一字一石経を出土している。墨書による文字の判読が行えるもの44点、墨書痕跡が残るもの301点、土器片（土師器片）に墨書を施すものが8点ある。石については薄平な川原石を用いている。また、経塚は3SX61の整地層を切り込んでおり、3SD40・50及び3SX61の整地後に造られたものである。

## 土壌

### 3SK57 (Fig.4・5)

調査区南西隅で検出したピットで遺構の1/3程度は調査区外へ延びると考えられる。検出長約1.7m、深さ約0.43mを測る。遺物は土師器小皿片、瓦を出土している。

## その他の遺構

### 溝×溜り状遺構

#### 3SX01 (Fig.4・5)

調査区東側で検出した溝若しくは溜り状の遺構である。検出長約11.5m、幅約2.7、深さ約0.1mを測る。遺構の東側（3SX01a）、中央（3SX01b）、西側（3SX01c）で遺物の出土に若干の相違が見られ、東側が遺物の出土量が多く、特に土師器小皿（灯明皿）の出土が顕著である。また、縄目痕、布目痕を残す素焼系の瓦も多く出土しており、他に鉄釘、石塔片も出土している。

## 不明遺構

#### 3SX02 (Fig.4・5)

調査区東側で検出した落ち込みである。検出最大幅約7.5m、深さ約0.27mを測る。近現代の遺物が多く含まれるが、土師器小皿片、同安窯系青磁碗片、鉄釘、染付片、陶器片を出土している。



Fig. 5 遺構全体図 (1/200)

整地層

3SDX06 (Fig.4・5)

3SD40・50 埋没後、若しくは埋没時に整地された痕跡である。埋土は黒色系で、確認した面から多量の薄平な川原石を出土している。また、石塔片や火葬骨も出土している。

3SX10 (Fig.4・5)

調査区中央で検出した、浅い土壇状を呈する整地層と考えられる。埋土は茶褐色系を呈し、最大深さ約0.12 mを測る。遺物は土師器土鍋片、粘土塊、平瓦を出土している。

3SX25 (Fig.4・5)

3SD40 埋没後、若しくは埋没時に整地された痕跡で、埋土は黒色土である。遺物は土師器小皿片、磁器壺片、鉄釘、平瓦が出土している。

3SX45 (Fig.4・5)

調査区北側で検出した土師器片を多量に含む整地層である。埋土は茶色土である。土師器杯・小皿の破片が多量に入り、また鉄釘・火葬骨も出土している。

3SX61 (Fig.4・5)

調査区中央で検出した整地層である。埋土は地山に近似しており、暗茶色土である。遺物は土師器土鍋片、坏片、小皿片が出土している。

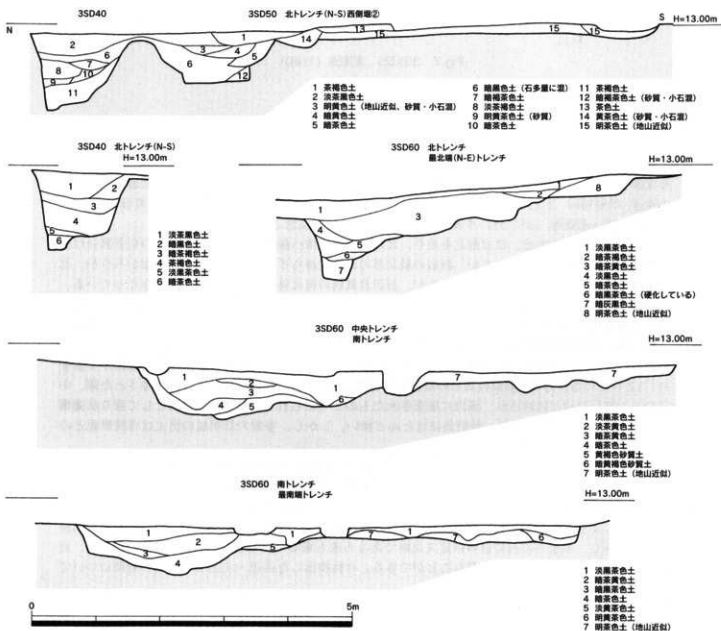


Fig.6 3SD40・50・60 土層観察図 (1/60)

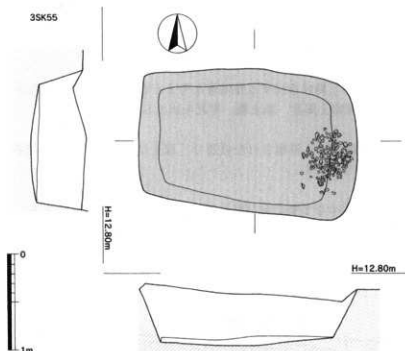


Fig.7 3SK55 実測図 (1/40)

#### (4) 出土遺物

遺物実測一覧表を参照のこと。

#### (5) 小結

今次調査では、部分的にトレンチ調査ではあったものの、坂東寺薬師堂を区画する溝状遺構が調査区内の西辺 (3SD60) と北辺 (3SD40・50) で確認された。これらの溝は後の整地により埋没しており、整地後に一字一石経塚 (3ST55) や溜り状遺構 (3SX01) が造営されたと考えている。

区画された溝は西辺では、ほぼ南北を走り、北西隅で若干東へ振れている。北辺溝との交差部分は調査区外であり、詳細は不明であるが、西辺の最北部の北側段落ち手前で合致するのではなかろうか。北辺の東西軸は真東からやや南へ振れているが、西辺北東隅の南北軸とはほぼ直交する軸をとっている。

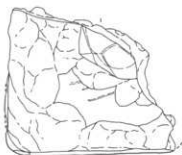
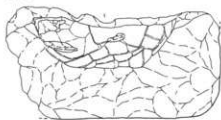
西辺溝 (3SD60) 北辺溝 (3SD40・50) は整地により埋没したと考えられ、溝埋土に多数の火葬骨や凝灰岩製石塔片及び円礫が多量に出土しており、整地層にも円礫が大量に見られた。これらの遺物から、溝内側の薬師堂敷地部分に中世墓等があったことが想定される。

出土遺物から見ると、西辺溝 (3SD60) 北辺溝 (3SD40・50) ともに中・近世の遺物が多数を占め、12世紀中頃から14世紀代までの遺物も存在する。これは16世紀後半以降に整地された際、中世墓やその他の遺構が破壊され、溝内に廃棄されたものと考えられる。整地後の遺構として溜り状遺構 (3SX01) があるが、出土遺物に時期差はほとんど無い。しかし、多数の灯明皿の出土は寺院祭祀との関係が考えられる。

一字一石経塚 (3SK55) については近世期の所産と考えられ、68487個の石を確認している。その中には土器片に書かれたものが存在し、土器片は土師器坏片が7点である。文字については「法華経」と考えられ、經典文字数 (同一文字数) と出土文字数の定量的な分析を今後行わなければならない。

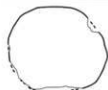
今次調査により、少なくとも室町期以降には坂東寺薬師堂が存在していたことが遺構・遺物から判断できる。しかし、坂東寺境内には県指定文化財である石造五重塔 (貞永元年：1232年銘) があり、史実としてはこの段階までは確実に遡ることができる。今回検出した西辺・北辺溝と整地の時期については4次調査成果と合わせて考察する。

3SD03



0 20cm

3SD40



0 10cm

3SD50



0 10cm



0 10cm



0 10cm

Fig.8 3SD03·40·50 出土遺物実測図 (1/3·1/4·1/6)

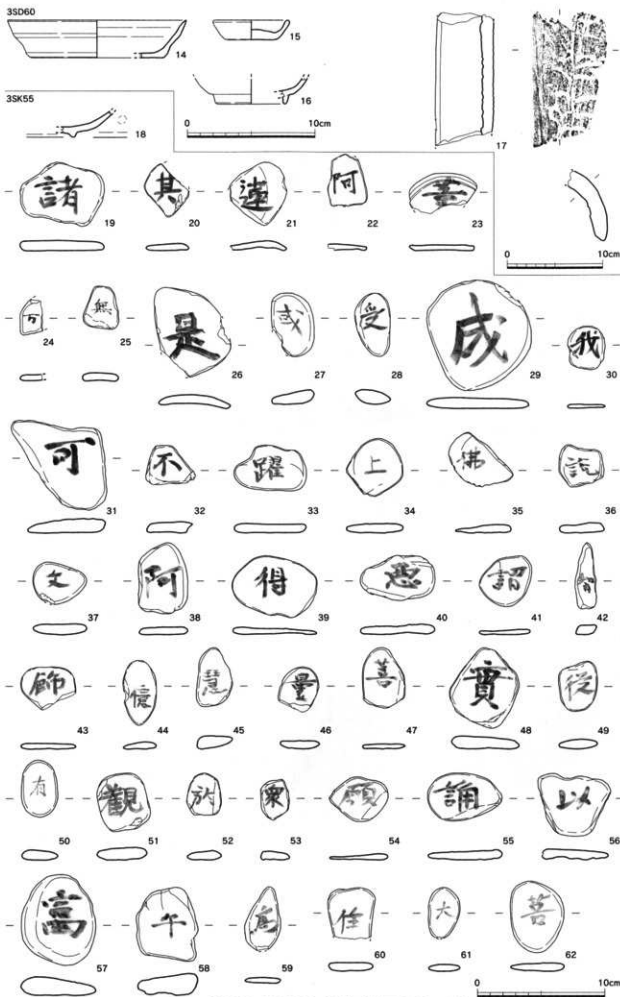


Fig.9 3SD60、3SK55 出土遺物実測図 (1/3・1/4)

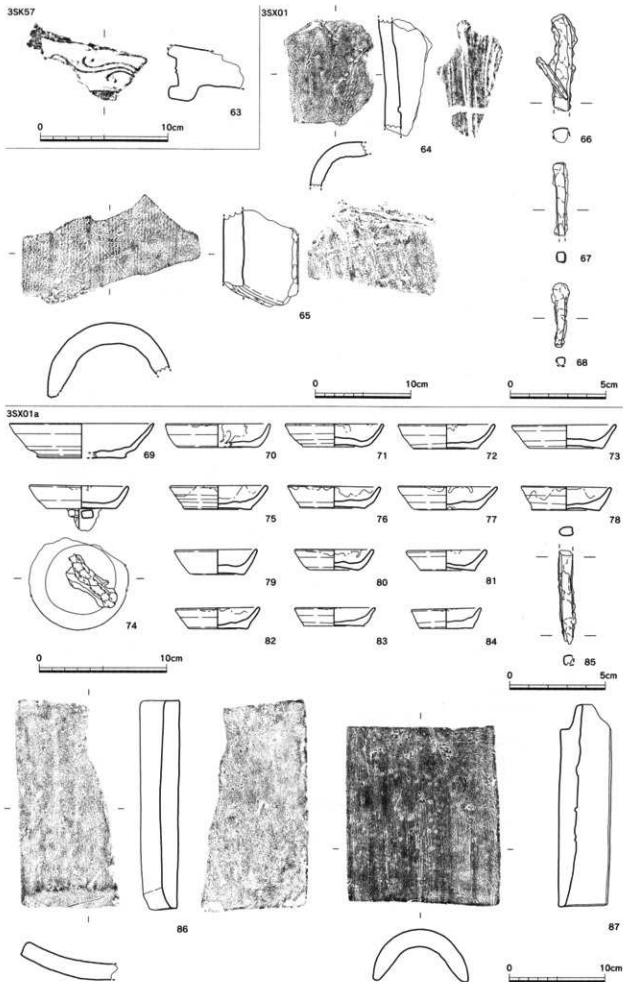


Fig.10 3SK57、3SX01・01a 出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4)



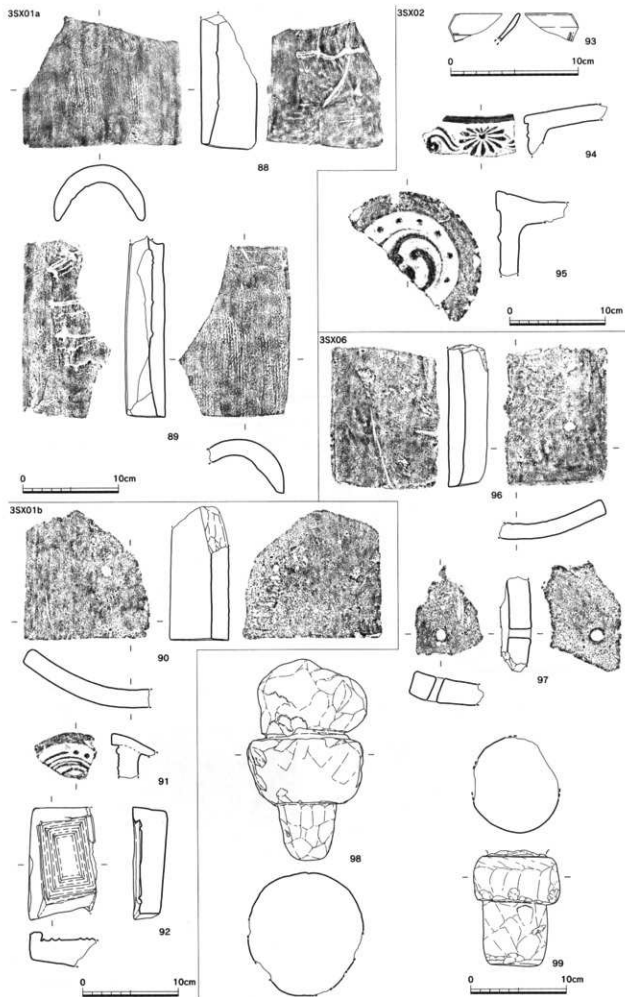


Fig.11 35X01a·01b·02·06 出土遺物実測図 (1/3・1/4)

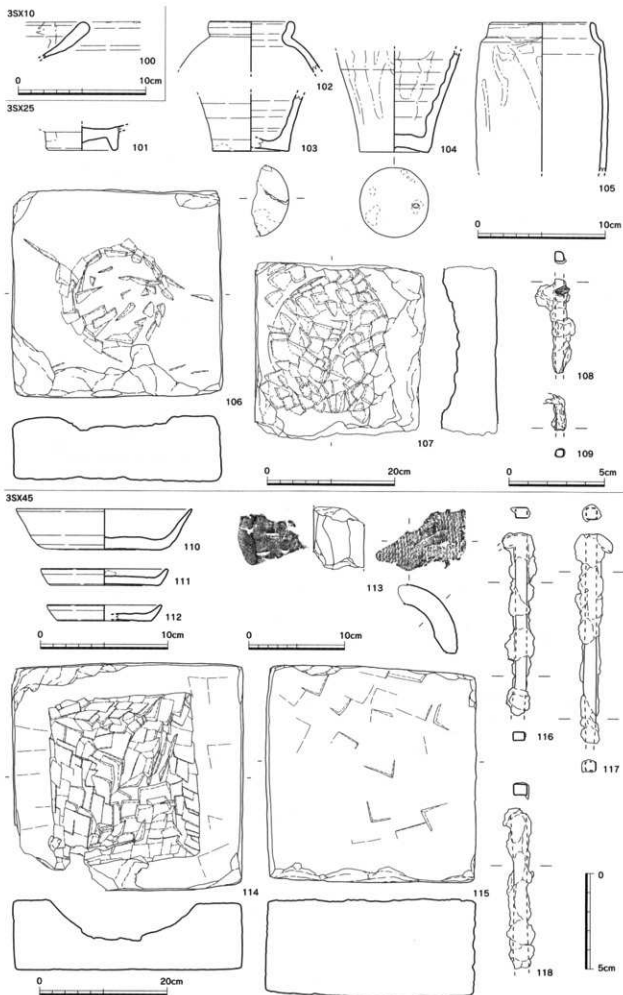


Fig.12 3SX10・25・45 出土遺物実測図 (1/2・1/3・1/4・1/6)

3SX61

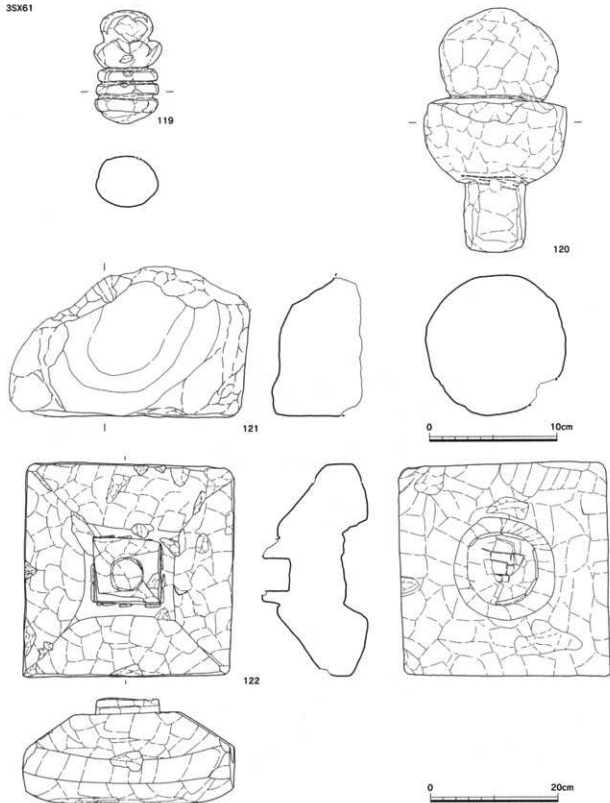


Fig.13 3SX61 出土遺物実測図 (1/3 · 1/6)

Tab.2 遺物観察表

遺物	S-番号	Fig. 番号	図番号	器種	器形	口径	器高	底径	残存	備考		
3SD03	3	8	1	石製品	石塔片	23.55+α	26.85+α	10.25+α	一部欠	五輪塔、地輪、凝灰岩		
3SD03	3	8	2	石製品	石塔片	17.75+α	33.65+α	11.7+α	完形	五輪塔、地輪、凝灰岩		
3SD40	40	8	3	03	土師器	土鍋	-	2.8+α	-	小片		
3SD40	40	8	4	01	土製品	瓦	12.9+α	8.3+α	2.5	片	丸瓦	
3SD40	40	8	5	02	土製品	瓦	3.2+α	10.0+α	1.5	小片	軒丸瓦、高さ5.2+αcm	
3SD40	40	8	6	04	石製品	石塔片	18.1+α	10.6	8.6+α	完形	五輪塔、空輪、風輪、凝灰岩	
3SD50	50	8	7	04	土師器	土鍋	-	3.0+α	-	口縁片		
3SD50	50	8	8	03	磁器	碗	-	3.1+α	-	小片	龍泉窯系青磁皿目録	
3SD50	50	8	9	05	陶器	甕	-	7.95+α	(16.0)	底部片		
3SD50	50	8	10	07	土製品	瓦	18.4+α	7.5+α	1.75	片	丸瓦	
3SD50	50	8	11	01	土製品	瓦	8.8+α	9.45+α	2.0	片	軒丸瓦	
3SD50	50	8	12	02	土製品	瓦?	12.9+α	12.3+α	8.4+α	片	丸瓦	
3SD50	50	8	13	06	石製品	石塔片	9.25+α	7.05	6.4	一部欠	五輪塔、空輪、風輪、凝灰岩	
3SD60	53②③	9	14	03	土師器	坪	(14.0)	2.95	(10.6)	1/4		
3SD60	53②③	9	15	02	土師器	小皿	(5.7)	1.55	(4.0)	1/3		
3SD60	53①~④	9	16	04	瓦器	椀	-	-	(5.6)	小片		
3SD60	53①~④	9	17	01	土製品	瓦	13.9+α	4.1+α	1.75	片	丸瓦	
3SK55	55	9	18	09	瓦器	椀	-	21.5+α	-	片		
3SK55	55	9	19	01	石製品	一字一石錠	5.05	6.6	0.8	片	重さ32.5g	漆
3SK55	55	9	20	02	土師器	一字一石錠	4.2+α	3.5	0.55	片	重さ26.3g土器の破片を使用	其
3SK55	55	9	21	03	土師器	一字一石錠	4.95	4.5	0.6	片	重さ12.6g土器の破片を使用	蓮
3SK55	55	9	22	04	土師器	一字一石錠	4.15	3.1	0.5	片	重さ7.2g土器の破片を使用	阿
3SK55	55	9	23	05	土師器	一字一石錠	3.2+α	5.35	0.45	片	重さ8.3g土器の破片を使用	?
3SK55	55	9	24	06	土師器	一字一石錠	2.8+α	1.75+α	0.45	片	重さ3.3g土器の破片を使用	万
3SK55	55	9	25	07	土師器	一字一石錠	3.4	2.8	0.6	片	重さ5.8g土器の破片を使用	無
3SK55	55	9	26	08	土師器	一字一石錠	7.0+α	6.0	0.7	片	重さ28.5g土器の破片を使用	足
3SK55	55	9	27	10	石製品	一字一石錠	5.0	3.4	1.0	完形	重さ26.2g	成
3SK55	55	9	28	11	石製品	一字一石錠	5.0	2.8	1.1	完形	重さ22.2g	受
3SK55	55	9	29	12	石製品	一字一石錠	8.65	8.2	0.85	完形	重さ11.04g	成
3SK55	55	9	30	13	石製品	一字一石錠	3.4	2.95	0.3	完形	重さ5.9g	我
3SK55	55	9	31	14	石製品	一字一石錠	7.1	7.5	1.15	完形	重さ75.7g	可
3SK55	55	9	32	15	石製品	一字一石錠	3.1	3.9	0.9	完形	重さ10.8g	不
3SK55	55	9	33	16	石製品	一字一石錠	3.6	5.7	0.75	完形	重さ21.2g側面に墨がついたよう な箇所あり	難
3SK55	55	9	34	17	石製品	一字一石錠	4.55	4.45	0.75	完形	重さ21.4g	上
3SK55	55	9	35	18	石製品	一字一石錠	4.3	5.05	0.6	完形	重さ15.3g	佛
3SK55	55	9	36	19	石製品	一字一石錠	3.35	3.55	0.75	完形	重さ11.0g	?
3SK55	55	9	37	20	石製品	一字一石錠	3.3	4.2	0.8	完形	重さ17.6g	文
3SK55	55	9	38	21	石製品	一字一石錠	5.6	3.85	0.6	完形	重さ24.6g	阿
3SK55	55	9	39	22	石製品	一字一石錠	4.9	6.65	0.55	完形	重さ25.3g	得
3SK55	55	9	40	23	石製品	一字一石錠	3.55	5.85	0.8	完形	重さ22.0g	?
3SK55	55	9	41	24	石製品	一字一石錠	4.0	4.1	0.4	完形	重さ10.0g	厨
3SK55	55	9	42	25	石製品	一字一石錠	5.20	1.70	0.75	完形	重さ10.3g	智
3SK55	55	9	43	26	石製品	一字一石錠	3.35	4.30	0.45	完形	重さ11.6g	?
3SK55	55	9	44	27	石製品	一字一石錠	5.05	2.60	0.60	完形	重さ12.0g	徳or徳?
3SK55	55	9	45	28	石製品	一字一石錠	4.60	2.80	1.00	完形	重さ19.1g	慧?
3SK55	55	9	46	29	石製品	一字一石錠	3.50	3.20	0.65	完形	重さ10.7g	量
3SK55	55	9	47	30	石製品	一字一石錠	4.75	3.4	0.4	完形	重さ11.4g	晋
3SK55	55	9	48	31	石製品	一字一石錠	6.3	5.5	1.0	完形	重さ55.7g	實
3SK55	55	9	49	32	石製品	一字一石錠	3.95	3.1	0.75	完形	重さ13.1g	?
3SK55	55	9	50	33	石製品	一字一石錠	4.45	2.85	0.8	完形	重さ14.8g	有
3SK55	55	9	51	34	石製品	一字一石錠	4.60	4.20	0.95	完形	重さ30.9g	觀(旧字)
3SK55	55	9	52	35	石製品	一字一石錠	3.30	2.70	0.70	完形	重さ9.6g	於(旧字)
3SK55	55	9	53	36	石製品	一字一石錠	3.20	2.25	0.65	完形	重さ6.9g	兼
3SK55	55	9	54	37	石製品	一字一石錠	3.5	4.7	0.5	完形	重さ9.8g	謙?
3SK55	55	9	55	38	石製品	一字一石錠	3.8	5.85	0.7	完形	重さ22.3g	難
3SK55	55	9	56	39	石製品	一字一石錠	4.95	5.7	0.75	完形	重さ33.3g	以
3SK55	55	9	57	40	石製品	一字一石錠	7.15	5.85	1.45	完形	重さ79.9g	富
3SK55	55	9	58	41	石製品	一字一石錠	5.8	4.85	1.6	完形	重さ65.3g	午
3SK55	55	9	59	42	石製品	一字一石錠	5.0	2.85	0.4	完形	重さ10.8g	為
3SK55	55	9	60	43	石製品	一字一石錠	4.05	3.7	0.65	完形	重さ19.7g	竹住

Tab.2 遺物観察表

遺構	S-番号	Fig. 番号	R番号	器種	器形	口径	器高	底径	残存	備考		
3SK55	55	9	61	44	石製品	一字一石縁	3.95	2.45	0.5	完形	重さ8.8g	大 普
3SK55	55	9	62	45	石製品	一字一石縁	5.6	4.15	0.65	完形	重さ24.8g	
3SK57	57	10	63	01	土製品	瓦	5.95	10.3+ $\alpha$	2.7	片	軒平瓦, 高さ5.9+ $\alpha$ cm	
3SX01	1	10	64	01	土製品	瓦	12.2+ $\alpha$	6.15	1.5	片	丸瓦	
3SX01	1	10	65	02	土製品	瓦	12.1+ $\alpha$	12.75+ $\alpha$	2.3	片	へろ記号あり, 丸瓦	
3SX01	1	10	66	03	鉄製品	釘	5.1+ $\alpha$	0.8	0.75+ $\alpha$	片	重さ8.6g	
3SX01	1	10	67	04	鉄製品	釘	3.8+ $\alpha$	0.55	0.5	完形	重さ2.9g	
3SX01	1	10	68	05	鉄製品	釘	3.35+ $\alpha$	0.5	0.45+ $\alpha$	完形	重さ2.0g	
3SX01	1a	10	69	25	土脚器	小皿	(11.2)	2.7	(7.0)	1/4		
3SX01	1a	10	70	23	土脚器	小皿	(8.1)	1.85	(5.8)	1/3	油煙痕あり	
3SX01	1a	10	71	11	土脚器	小皿	7.55	1.8	4.6	完形	油煙痕あり	
3SX01	1a	10	72	12	土脚器	小皿	7.45	1.95	4.95	3/4	油煙痕あり	
3SX01	1a	10	73	13	土脚器	小皿	(8.05)	1.9	5.75	2/3		
3SX01	1a	10	74	15	土脚器	小皿	(7.8)	1.85	5.5	3/4	鉄釘付着, 油煙痕あり	
3SX01	1a	10	75	10	土脚器	小皿	7.45	1.85	5.3	完形	油煙痕あり	
3SX01	1a	10	76	17	土脚器	小皿	7.1	1.8	5.15	一部欠	油煙痕あり	
3SX01	1a	10	77	14	土脚器	小皿	7.8	1.9	5.05	3/4	油煙痕あり	
3SX01	1a	10	78	16	土脚器	小皿	6.9	1.9	5.4	3/4	油煙痕あり	
3SX01	1a	10	79	22	土脚器	小皿	(6.35)	2.0	4.2	2/3		
3SX01	1a	10	80	24	土脚器	小皿	(5.9)	1.6	(3.8)	1/3	油煙痕あり	
3SX01	1a	10	81	19	土脚器	小皿	6.1	1.6	4.4	完形	油煙痕あり	
3SX01	1a	10	82	21	土脚器	小皿	6.45	1.7	4.55	2/3	油煙痕あり	
3SX01	1a	10	83	20	土脚器	小皿	6.15	1.45	4.75	完形	油煙痕あり	
3SX01	1a	10	84	18	土脚器	小皿	5.4	1.6	4.3	完形	油煙痕あり	
3SX01	1b	10	85	26	鉄製品	釘	4.9+ $\alpha$	0.7	0.5	一部欠	重さ5.7g	
3SX01	1a	10	86	06	土製品	瓦	21.9	10.1+ $\alpha$	1.8	4/5	平瓦	
3SX01	1a	10	87	07	土製品	瓦	21.2	10.0	1.8	完形	丸瓦	
3SX01	1a	11	88	08	土製品	瓦	14.2+ $\alpha$	9.5	1.85	1/2	丸瓦	
3SX01	1a	11	89	09	土製品	瓦	18.7	7.8+ $\alpha$	2.1	3/4	丸瓦	
3SX01	1b	11	90	29	土製品	瓦	14.0+ $\alpha$	13.1+ $\alpha$	1.9	片	平瓦	
3SX01	1b	11	91	28	土製品	瓦	4.55+ $\alpha$	6.1+ $\alpha$	2.05	片	重さ4.65+ $\alpha$ cm, 軒丸瓦	
3SX01	1b	11	92	27	土製品	不明(口)	11.75+ $\alpha$	7.2+ $\alpha$	3.6	一部欠		
3SX02	2	11	93	02	磁器	碗	-	2.2+ $\alpha$	-	小片	外面に膠目文様あり。 同安東系青磁碗 1-1期	
3SX02	2	11	94	01	土製品	瓦	8.7+ $\alpha$	9.8+ $\alpha$	1.75	片	高さ5.25+ $\alpha$ cm, 軒平瓦	
3SX02	2	11	95	03	土製品	瓦	7.45+ $\alpha$	13.8+ $\alpha$	2.2	片	高さ13.85+ $\alpha$ cm, 軒丸瓦	
3SX06	4	11	96	01	土製品	瓦	14.9+ $\alpha$	11.25+ $\alpha$	1.7	片	平瓦	
3SX06	6	11	97	02	土製品	瓦	12.4+ $\alpha$	8.6+ $\alpha$	2.6	片	平瓦, 穿孔あり	
3SX06	6	11	98	01	土製品	石塔片	21.1	12.15	12.9	一部欠	五輪塔, 空輪, 風輪, 葺灰岩	
3SX06	4	11	99	02	石製品	石塔片	12.15+ $\alpha$	9.0	9.9+ $\alpha$	一部欠	五輪塔, 空輪, 葺灰岩	
3SX10	10検出	12	100	01	土脚器	土鍋	-	2.9+ $\alpha$	-	口縁片		
3SX25	25	12	101	07	磁器	碗	-	2.0+ $\alpha$	(5.6)	底部片	白磁碗V類	
3SX25	25	12	102	03	陶器	壺	6.6	4.0+ $\alpha$	-	口縁片		
3SX25	25	12	103	06	陶器	壺	-	4.45+ $\alpha$	(6.0)	底部片	底部外面に目録4+所あり	
3SX25	25	12	104	04	陶器	壺	-	8.0+ $\alpha$	5.4	底部片		
3SX25	25	12	105	05	陶器	壺	(8.4)	11.7+ $\alpha$	-	口縁~体部		
3SX25	25	12	106		石製品	石塔片	32.65	33.15	10.3	完形	五輪塔, 地輪, 葺灰岩	
3SX25	25	12	107		石製品	石塔片	26.8	27.9	8.85	完形	五輪塔, 地輪, 葺灰岩	
3SX25	25	12	108	01	鉄製品	釘	4.95+ $\alpha$	0.45	0.5	先端欠	重さ6.4g, 木置片付着	
3SX25	25	12	109	02	鉄製品	釘	1.85+ $\alpha$	0.4	0.4	小片	重さ1.2g	
3SX45	45	12	110	04	土脚器	坪	(13.7)	3.2	9.0	口縁~体部1/3	底部ゆがみあり	
3SX45	45	12	111	03	土脚器	小皿	(9.8)	1.3	(8.4)	1/3	灯明皿に使用されたか?	
3SX45	45	12	112	02	土脚器	小皿	(8.9)	1.25	(7.3)	1/3		
3SX45	45	12	113	01	土製品	瓦	6.55+ $\alpha$	6.2+ $\alpha$	2.3	片	丸瓦	
3SX45	45	12	115		石製品	石塔片	34.0	33.15	15.35	完形	基礎部, 葺灰岩	
3SX45	45	12	116	07	鉄製品	釘	9.45+ $\alpha$	0.6	0.5~0.45	完形	重さ20.8g	
3SX45	45	12	117	06	鉄製品	釘	10.95+ $\alpha$	0.55	0.55~0.45	完形	重さ26.2g	
3SX45	45	12	118	05	鉄製品	釘	8.2+ $\alpha$	0.7	0.55	完形	重さ19.2g	
3SX61	50.61	13	119	01	石製品	石塔片	8.9	5.3	4.0	完形	宝塔, 相輪, 葺灰岩	
3SX61	50.61	13	120	02	石製品	石塔片	19.2	11.2	10.9	完形	五輪塔, 空輪, 風輪, 葺灰岩	
3SX61	50.61	13	121	03	石製品	石塔片	11.85+ $\alpha$	18.9+ $\alpha$	70.5+ $\alpha$	完形	五輪塔, 地輪, 葺灰岩	
3SX61	61	13	122	01	石製品	石塔片	33.75	33.25	16.6	完形		

## 熊野屋敷遺跡(第4次調査)

### (1) はじめに

熊野屋敷遺跡(第4次調査)は有水山坂東寺が保有する筑後市大字熊野字屋敷に所在し、竹林に覆われた起伏の著しい丘陵部北斜面に立地する。当遺跡は熊野屋敷遺跡第3次調査並びに現地踏査によって境内を取り囲む土塁の存在が明らかであった。調査要因となったのは社団法人有水山坂東寺が駐車場用地として整備する造成工事が計画され、土塁の一部が掘削及び削平を受けることとなったためであり、調査依頼を受けた教育委員会は確認調査として破壊を受ける箇所と土塁が存在する範囲について地形測量を行うこととした。調査は小林勇作、地形測量は上村英士が担当し、期間は平成21年4月20日から同年5月12日まで実施した。

以下は調査内容について報告する。

### (2) トレンチの設定

第1トレンチ (Fig.15・16、Pla26~33)

当トレンチは境内北側の土地に出入りとして使用されているスロープに位置する。トレンチは長さ16.2m、幅1.3mで南から北方面に対して緩やかに落ち込み、南部と北部のレベル差は約1mである。トレンチの南側では狭小の南北溝(4SD01)、中央部では東西方の溝(4SD10)、ピット(4SP02)が検出された。

第2トレンチ (Fig.15・16、Pla34~38)

当トレンチは第1トレンチで新たに検出された溝(4SD10)と溝に対してほぼ並行に走る2条の土塁を明らかにし、各遺構の遺物を採取することを目的とした。場所は工事によって掘削及び削平を受ける範囲の最東端に設置した。トレンチは長さ12.5m、幅1.3~2.0m、溝及び土塁に対し直行するよう南北方向に設置した。なお、溝(4SD10)より北側は工事による掘削・削平が及ばないため、今回は北側土塁については中心部まで断ち割った。

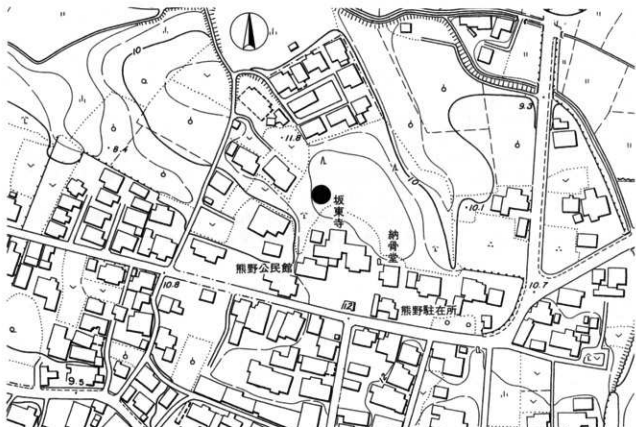


Fig.14 熊野屋敷遺跡(第4次調査)調査地点位置図(1/2500)

### (3) 検出遺構

溝

4SD01 (Fig.15・16, Pla26)

第1トレンチ南部で検出した南北溝で南側は調査区外へ延び、北側に1.6m分を検出したところで終息する。西から東にかけて若干傾斜する地形であり、上幅0.60m、下幅0.27m、検出面からの深さ0.40m前後を測る。土層から溝の西岸近くに掘り直した痕跡があり、北側底部に見られた段状痕跡はこれによるものである。埋土に砂粒の発達層が見られないことから流水は伴っていないものと考えられる。溝からは土師器(皿・片)、凝灰岩製石塔(破片)が出土している。

4SD10 (Fig.15・16, Pla26~38)

北側土塁(4SX20)と南側土塁(4SX30)に挟まれた東西方向の溝である。今回は第1トレンチ及び第2トレンチで確認され、土塁に沿って構築されているものと想定される。トレンチ間の長さは24.5mを測る。逆台形状に近い断面形を呈し、溝底はほぼフラットな状態であった。上幅2.07~2.51m、下幅0.93~1.15mを測り、上面からの深さは1.74m前後に達する。溝の埋土は北岸及び南岸から流入した堆積をなし、土層では2回の掘り直しが確認された。各段階における溝底部のレベルをトレンチ別に比較すると何れの段階も東高西低であった。出土遺物は第2トレンチから少量の土師器(皿)、瓦器(碗)、石塔、石製品等を出土している。なお、出土遺物は上層を黒褐色土(土層17~26)、下層を黄褐色土(土層27~30)に分けて取上げた。

4SX20 (Fig.15・16, Pla26~38)

4SX20は4SD10の北側で検出した東西方向の土塁を指す。土塁の西側は北側に面した土地に出入りするための現代のスロープが存在し、スロープより西方は約10m、東方は約60m分が現状として残存する。現状土塁の西端部は隣地との境界で消失し、東端部は盛土の痕跡を残しながらも緩やかに落ち込みながら終息する。土塁の断面形状は傾斜の強い山形状を呈する。当土塁はトレンチを貫通していないため構築時の傾斜角を比較することができないが、地形測量では4SD10が存在する南斜面が北斜面よりも傾斜が若干強いことがわかる。盛土に関しては比較的安定した地山上に構築されており、地山上には茶灰色ブロックが混在する黒褐色土(土層16)、黄褐色粘質土(土層15)、か厚く堆積、10cm程度の表土(黒褐色土)がこれを覆う。盛土は適度に締まりのある土であったが版築した状況は確認できない。トレンチからの出土遺物は得られていない。

4SX30 (Fig.15・16, Pla26~38)

4SX30は4SD10の南側に存在する逆L字条の土塁を指す。土塁西部は4SX20と同様に現代のスロープを基点に東西へ展開し、西端部は隣地境界付近で消失する。東部はコーナー付近で盛土が一旦終息するが南方に向きを変えて展開し、南方へ延びた土塁南端部は現存の納骨堂手前で分断される。西方部分は全長約10m、スロープより土塁東部コーナーまでの長さは約50m、コーナーより南方へは30mが残存する。土塁の断面形状は概ね台形状を呈するが、傾斜は4SD10が存在する北斜面は強く、南斜面は北斜面に比べて若干緩やかである。土塁は黄褐色粘質土の比較的安定した地山上に構築されており、黒褐色土を基調とした盛土で構成されており、暗黒褐色土層(2トレー14土層)を厚く敷設した上に粘質土ブロックを含む黒褐色系土層が粗く互層し土塁基部を造り出している。これらを腐植質系土層が厚く覆っているが、版築した状況は窺えず全体的に強固な土層を呈していない。トレンチからの出土遺物は皆無であった。

ピット

4SP02 (Fig.15・16, Pla26・27)

第1トレンチ中央部で検出した不整形なピットで深さは0.05mを測る。埋土は暗黒褐色土で土師器(土鍋)、染付(猪口)、瓦(丸瓦・平瓦)が出土している。

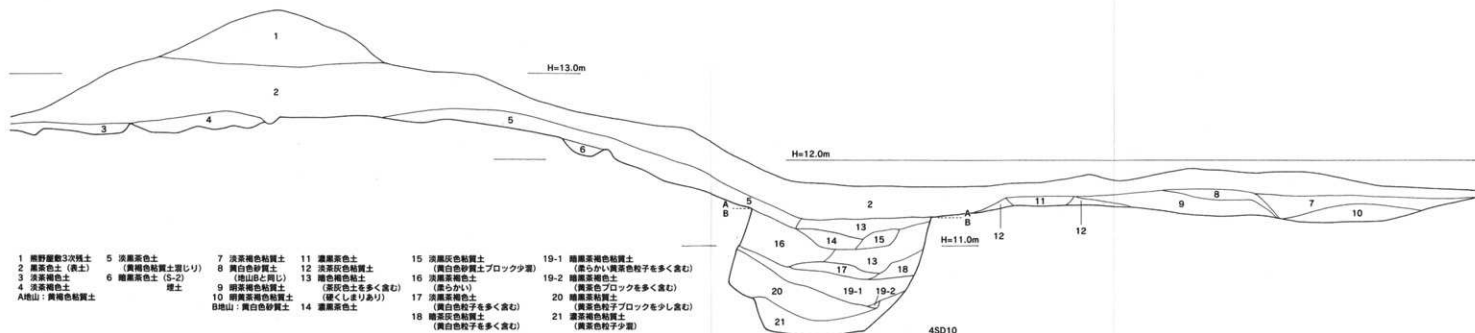


Fig. 15 熊野屋敷遺跡（第4次調査）地形測量図（1/300）



第1トレンチ(西壁土層)

45X30



- |             |             |             |             |                |                  |
|-------------|-------------|-------------|-------------|----------------|------------------|
| 1 黄褐色砂3次粘土  | 5 淡栗茶色土     | 7 淡栗茶色粘質土   | 11 濃栗茶色土    | 15 淡栗茶色粘質土     | 19-1 濃栗茶色粘質土     |
| 2 濃茶色土(黄土)  | (黄褐色粘質土混じり) | 8 黄白色粘質土    | 12 淡栗茶色粘質土  | (黄白色粘質土ブロック少量) | (黄らかい黄褐色粒子を多く含む) |
| 3 淡栗茶色土     | 6 濃栗茶色土(砂)  | (地山混じり)     | 13 雑色粘質土    | 16 淡栗茶色土       | 19-2 濃栗茶色土       |
| 4 淡栗茶色土     | 埋土          | 9 濃栗茶色粘質土   | (茶灰色土を多く含む) | (黄らかい)         | (黄褐色ブロックを多く含む)   |
| A地山: 黄褐色粘質土 |             | 10 濃栗茶色粘質土  | (黄らかい)      | 17 淡栗茶色土       | 20 濃栗茶色粘質土       |
|             |             | B地山: 黄白色粘質土 | 14 濃栗茶色土    | (黄白色粒子を多く含む)   | (黄褐色粘質土)         |
|             |             |             |             | 18 濃栗茶色粘質土     | 21 濃栗茶色粘質土       |
|             |             |             |             | (黄白色粘質土を多く含む)  | (黄褐色粘質土)         |

第2トレンチ(西壁土層)

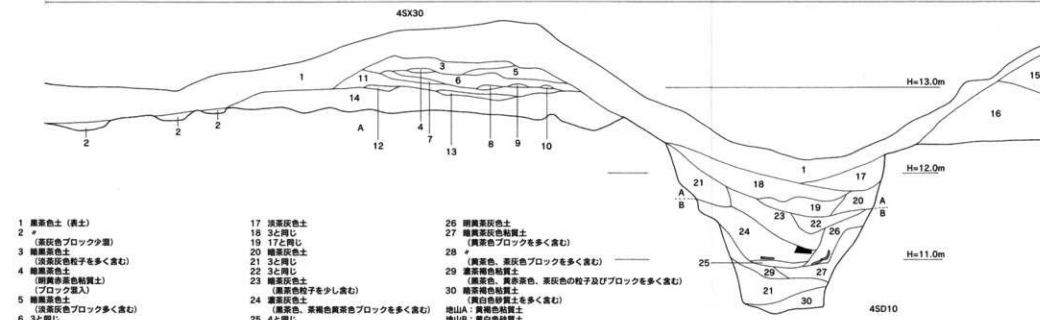
45X30

H=14.0m

H=13.0m

H=12.0m

H=11.0m



- |                           |              |                             |
|---------------------------|--------------|-----------------------------|
| 1 濃茶色土(黄土)                | 17 淡栗茶色土     | 26 濃栗茶色土                    |
| 2 *                       | 18 3cと同じ     | 27 濃栗茶色粘質土                  |
| 3 濃栗茶色土                   | 19 17と同じ     | (黄褐色ブロックを多く含む)              |
| 4 濃栗茶色土                   | 20 濃栗茶色土     | 28 *                        |
| (淡栗茶色粒子を多く含む)             | 21 3cと同じ     | (黄褐色、茶灰色、淡灰色ブロックを多く含む)      |
| 5 濃栗茶色土                   | 22 3cと同じ     | 29 濃栗茶色粘質土                  |
| (ブロック混入)                  | 23 雑色粘質土     | (黄褐色、黄褐色、茶灰色の粒子及びブロックを多く含む) |
| 6 濃栗茶色土                   | 24 濃栗茶色土     | 30 濃栗茶色粘質土                  |
| (淡栗茶色ブロック多く含む)            | (黄褐色粒子を少し含む) | (黄白色粘質土を多く含む)               |
| 7 4cと同じ                   | 25 4cと同じ     | B地山: 黄褐色粘質土                 |
| 8 濃栗茶色土                   |              | 地山B: 黄白色粘質土                 |
| (砂中に間雑茶色ブロックが混入)          |              |                             |
| 9 5dと同じ                   |              |                             |
| 10 8cと同じ                  |              |                             |
| 11 3cと同じ                  |              |                             |
| 12 7dと同じ                  |              |                             |
| 13 濃栗茶色土                  |              |                             |
| (間雑茶色ブロック及び淡栗茶色ブロックを多く含む) |              |                             |
| 14 3cと同じ                  |              |                             |
| 15 黄褐色粘質土                 |              |                             |
| 16 3cと同じ                  |              |                             |

45D01

H=12.00m



Fig.16 第1・2トレンチ、45D01土層断面実測図 (1/40)

#### (4) 出土遺物

清

4SD01 (Fig.15・16, Pla43)

土師器

皿 (1・2) 1は底部細片で底径6.8cmを測る。外底は糸切りで板状圧痕が認められる。2は体部が若干内寄りに立ち上がる皿で口径12.5cm、底径9.6cm、器高2.8cmを測る。磨耗のため調整不明。

石塔

層塔 (3) 下部を欠損した相輪の一部で宝珠の下に請花はない。材質は凝灰岩製で表面は著しく磨耗している。宝珠径5.1cm、相輪径5.8cm、現存する重さは245gを量る。

石製品

不明 (4) 材質は凝灰岩製で径7cm前後の珠に三ツ爪を裝飾する。中心部の上下端部には径7mm、深さ5mm程度の穿孔を施す。重さは215gである。

4SD10 (Fig.17)

土師器

皿 (5) 口径16.2cm、底径11.2cm、器高2.4cmを復元する。外底は糸切りで調整はヨコナデを施す。

土鍋 (6) 口縁端部細片で上端部には縄目痕が残り、外面には煤が付着する。

瓦器

塊 (7) 口縁部細片で内外面の調整はヨコナデである。

白磁

碗 (8) 口縁部は如意状を呈し、淡茶白色の素地に淡灰白色の透明釉をかける。

4SD10黒褐色土 (Fig.17~20, Pla43・44)

陶器

水注 (9) 肩部の細片。外面にボタン状の裝飾が貼り付けられる。内外面は暗茶褐色を呈する。

瓦

平瓦 (10~15) 10は胎土に角閃石を多く含み、表面、芯ともに淡橙茶色を呈する土師質である。凹凸面はナデ、側縁部はヘラケズリの調整を施し、厚みは1.5cmを測る。11は表面が淡黒灰色、芯は淡灰色を呈する瓦質である。凹凸面は工具ナデ、側縁部はヘラケズリの調整を施し、厚みは1.7cmを測る。凸面には離れ砂が付着する。12は表面が淡灰茶色、芯は黒灰色を呈する。瓦質で凹凸面は工具ナデ、側縁部はケズリ後ナデ調整を施し、厚さは1.85cmを測る。13は表面、芯ともに淡灰茶色を呈し、凹面の一部に重ね焼き痕が認められる。瓦質で厚さは1.55cmを測る。凹凸面は工具ナデ、側縁部はヘラケズリである。14は表面が淡茶灰色、芯は暗茶灰色を呈し、凹凸面は工具ナデ、側縁部はヘラケズリである。厚みは2.15cmを測る。10~14は凹面側縁部には面取りを認める。15は凹凸面は工具ナデ、側縁部はヘラケズリである。表面は淡黒灰色、芯は淡灰色を呈する瓦質で厚みは1.9cmを測る。

丸瓦 (16~19) 16は胴部に釘穴を施す。凸面はケズリ、凹面は僅かに幅約3.5cmの模骨痕を認め、縄目の叩きを施す。表面は淡黒色、芯は乳灰白色を呈した瓦質である。17は表面が淡黒灰色、芯は乳灰白色を呈した瓦質である。凹面はかすかに縄目の叩きが見られ、叩き後工具ナデを施す。凸面、側縁部はヘラケズリの調整である。18は玉縁に近い位置に釘穴を施す。凹面には縄目叩きを認め、凹面玉縁付近に豆粒状の叩きを2箇所施す。凸面、側縁部はヘラケズリの調整である。表面、芯ともに淡茶灰色を呈した須恵質である。19は軒丸瓦である。巴文の頭部はやや丸みを帯び若干のくびれを認める。尾は短めで珠文の間隔は広めである。外縁の幅は広く高さは低い。珠文帯の内外縁線は見られない。釘穴は玉縁に近い位置に施す。凹面の一部に縄目叩き、棒状叩きを認め、凹面胴部は工具ナデを施す。凸面、側縁部はヘラケズリ調整。長さ27.1cm、幅14.7cm、胴部の厚み2.3cmを測る。

埴 (20) 表面、芯ともに淡茶褐色を呈する。表面は工具ナデ、側縁部はヘラケズリである。厚みは2.45cmと薄手であるが湾曲していないため埴とした。

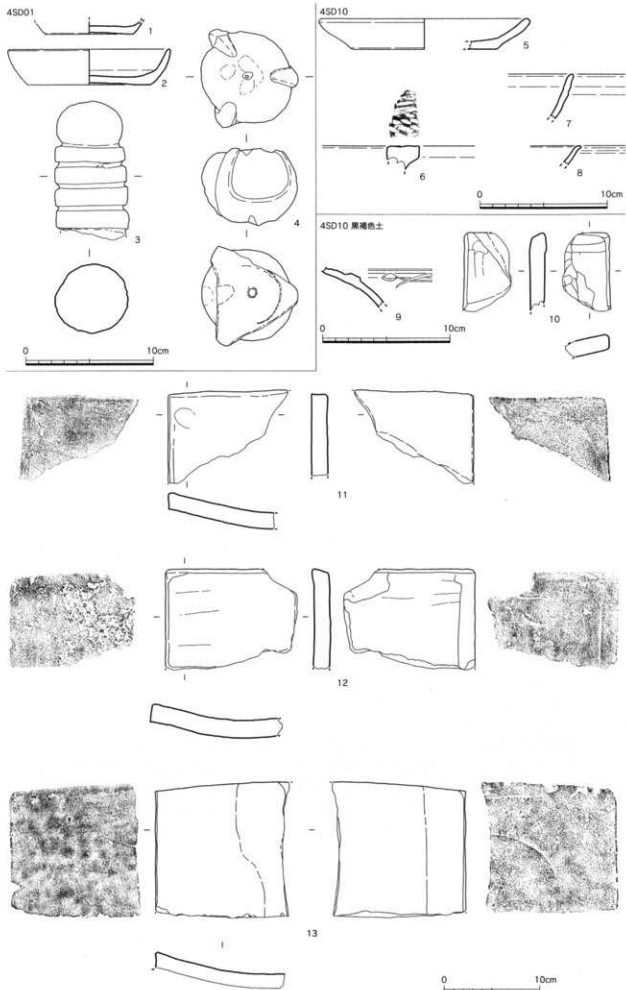


Fig.17 4SD01・10・10 黑褐色土出土遺物実測図 (1/3・1/6)

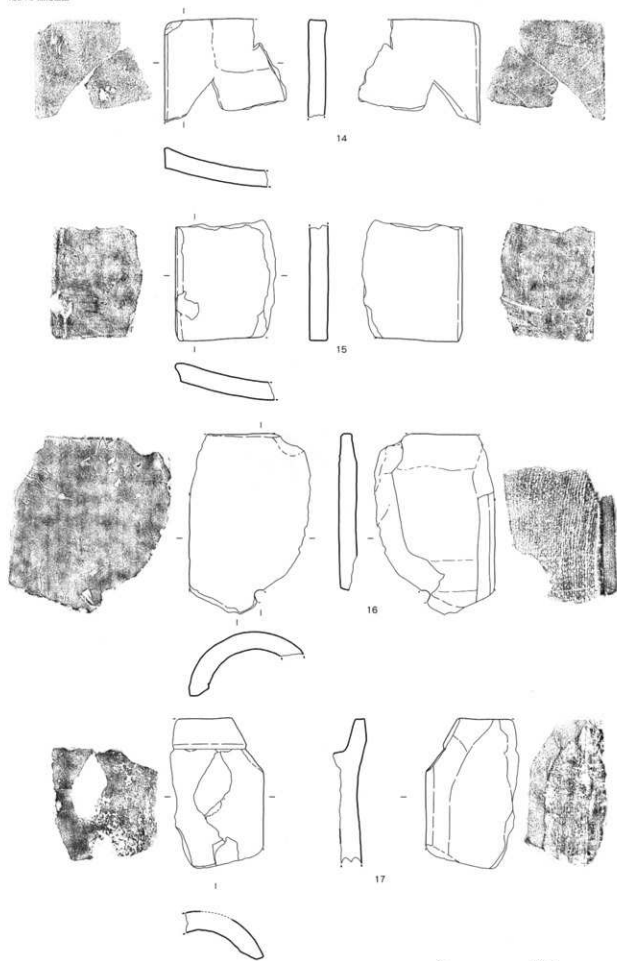


Fig.18 4SD10 黑褐色土出土遺物実測図 (1/4)

4SD10 黑褐色土

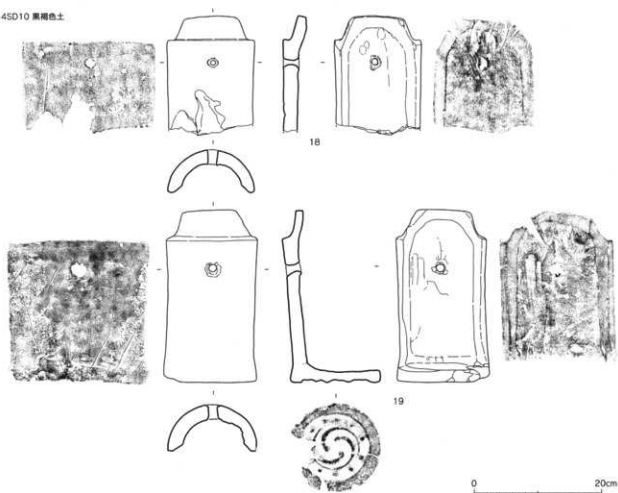
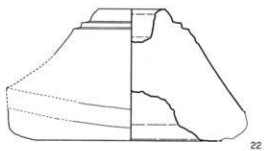
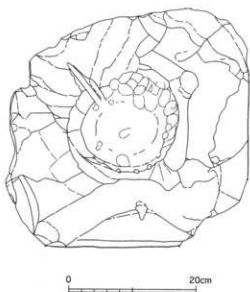
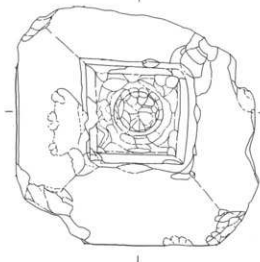
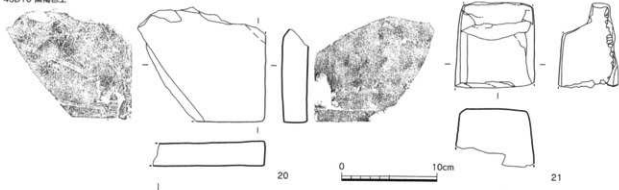
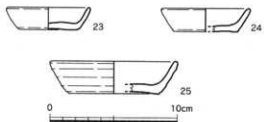


Fig.19 4SD10 黑褐色土出土遺物実測図 (1/6)

4SD10 黑褐色土



4SD10 黄茶色土



4SP02

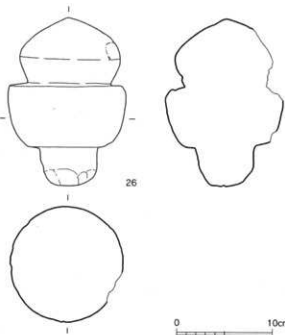
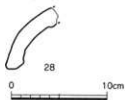
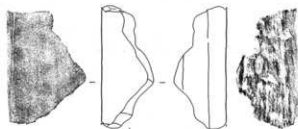
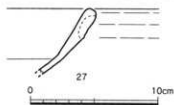


Fig.20 4SD10 黑褐色土・黄茶色土、4SP02 出土遺物実測図 (1/3・1/4・1/6)

石製品

砥石 (21) 石材は泥岩製と思われる。上面の一部及び下部が欠損しており、上面及び片側面を砥面として使用している。現存の重さは630g。

石塔

五輪塔 (22) 火輪で石材は凝灰岩製である。上部端にあたる空風輪との接合部は方形に整形された内部を細かくノミで削り出し、下部中央の水輪接合部は楕円形状にノミで粗く抉られている。幅37.6~38.0cm、高さ20.8cmを測る。

4SD10黄茶色土 (Fig.20, Pla44)

土師器

豆皿 (23・24) 23は口径4.4cm、底径6.6cm、器高1.75cm、24は口径6.8cm、底径5.0cm、器高1.8cmを復元する。共に外底は糸切り、内外面はヨコナデである。

小皿 (25) 口径9.5cm、底径7.1cm、器高2.55cmを復元し、外底は糸切り、内外面はヨコナデである。

石塔

五輪塔 (26) 空風輪で石材は凝灰岩製である。空輪径10.5cm、風輪径12.3cm、高さ17.6cmを測る。

ピット

4SP02 (Fig.20)

土師器

鍋 (27) 口縁部細片で端部は素口縁を呈する。口縁部は肥厚しており、体部は薄手である。

瓦

丸瓦 (28) 胴部細片で側面及び胴部凹面側縁は面取りを施す。凸面は燻銀を呈し、凹面には布目痕が残る。

### (5) 小結

今次調査において、中近世に両期のあった坂東寺に関連した土塁や溝などの遺構が検出されたことに加え、土器や石塔といった貴重な遺物が得られたことは成果であった。以下は、調査内容を振り返って成果をまとめる。

確認された2条の土塁は境内の北側に位置する。外側に配された4SX20は境内に沿って東西方向に延び、概ね75mが現存する。一方、内側の4SX30は東西から南北方向へ逆L字状に屈曲して確認されたが、双方の土塁の両端は何れも消失しており、その延長を辿ることはできない。更に、2条の土塁間からは4SD10を検出したが、これについても両端の状況は定かでない。

さて、土塁の構築にあたっては溝の開削に大きく関連していたことが予想される。4SX20 (外側) と4SX30 (内側) の堆積状況が全く異なる状況を呈していたことによるもので、大量の地山を使用して粗く積み上げた4SX20に対し、4SX30は腐植土に近い黒色土を粗くも水平に互層し構築している点である。この状況から、4SX20は4SD10の掘削土を利用して同時に構築されたと考えられ、4SX30は4SX20とは異なる工法で施工されたことがうかがえる。

築造年代については土塁、溝からの出土遺物が乏しいために今次調査のみでは追認し得えず、隣接した第3次調査成果 (特に整地時期) を考慮しなければならない。この点については本書「IV.考察」を参照されたが、4SD10から出土した16c後半以降の所産と考えられる瓦がひとつの指標となるであろう。

今次調査で確認した溝、土塁は、その規模や構造といった点から施設の性格や造営された意義は何であったらうか。坂東寺に関する歴史については、『筑後市史』や郷土史研究家 右田乙次郎氏がまとめた『坂東寺史』で知ることができる。中近世においては「元弘三年 (1333) 常住院幸有、長末衆形部坊の合戦にて坂東寺焼失、天正十二年 (1584) 戸次道雪、高橋紹運が在陣」などの記載があり、坂東寺は中近世の動乱に曹囂していたことがうかがえる。溝と土塁は、こうした背景の中で築造、造営された防御施設であると同時に寺領の空間を区画する性格を合わせ持った施設と考えられよう。

## IV. 考察

熊野屋敷遺跡第3次調査（以下、3次調査）と第4次調査（以下、4次調査）の各遺構時期や変遷について考察する。

### 1. 検出された遺構

3次調査では調査区内西辺と北辺で溝状遺構を検出しており、坂東寺薬師堂を区画していた溝であると考えられる。現在の土地境界もこの溝ラインにほぼ沿っており、西辺では地形が段落し、北辺では4次調査検出の溝状遺構（土塁）が現存する地形である。西・北辺溝状遺構の内側（坂東寺薬師堂敷地内）からは一字一石経塚や溜り状遺構が検出されており、これらは後述する整地後の所産であると考えられる。

### 2. 溝及び土塁の時期と変遷

西辺溝については、3次調査検出面では不定形な平面形態を示したが、最深部では逆台形の溝であり、人為的掘削による南北に延びる溝である。北辺溝（SD40）についても最深部は逆台形を呈するものと考えられ、その内側の溝（SD50）についても調査区内で途切れるが、埋没過程はほぼ同様であることから二重の溝であったとも考えられる。

北辺溝については、3次調査検出溝（SD40・50：以下3次調査溝）と4次調査検出溝（SD10：以下4次調査溝）及び並行する土塁（SX20・30：以下4次調査土塁）は同じ方位を示しており、共に坂東寺薬師堂を区画する溝（土塁）と理解できる。

3次調査溝と4次調査溝・土塁の時期及び変遷については、3次調査で確認した整地時期を考えなければならない。

3次調査溝内には多数の石塔片及び火葬骨片が出土しており、溝内側敷地内に墓地群があったと考えられる。墓地群の時期は五輪塔や宝塔から14世紀代以降のものと考えられる。坂東寺境内には県指定文化財である石造五重塔（貞永元年：1232年銘）があり、出土遺物中に13世紀代の遺物が見られることから、13世紀～14世紀代には、3次調査溝で南北・東西に区画された坂東寺薬師堂敷地内に墓地群が形成されていたことがうかがえる。

次に、墓地群が何らかの理由により破壊され、3次調査溝を埋没させることとなり、同時に面的な整地が行われた様子うかがえる。3次調査溝出土遺物及び整地層遺物を観察する限り、時期的な差がほとんど見られない。また、4次調査土塁（南側土塁）積土に関しては、3次調査整地層と同様な遺物構成であり、敷地内墓地を破壊し、3次調査溝を埋め、4次調査土塁を造営したという一連の流れが想定できる。時期に関しては4次調査溝内の瓦を16世紀後半としており、3次調査整地の遺物の下限及び3次調査溜り状遺構出土遺物と近似することから、16世紀後半以降に3次調査の整地が行われ、4次調査溝・土塁が造営されたものと考えられる。

坂東寺薬師堂内について、検出された溝等から、以下の時期的変遷がうかがえる。

13世紀代→石造五重塔（1232年）、3次調査出土遺物に土鍋、瓦器椀、竜泉窯系青磁など（該当遺構はない）

14世紀以降→五輪塔、宝塔片から敷地内に墓地群の展開

16世紀後半以降→3次調査溝埋没＝整地→4次調査溝・土塁造営

17世紀以降→一字一石経塚、3次調査SX01溜り状遺構

### 3. 坂東寺について

坂東寺創建に関しては、延暦年間の創建という伝承が残るが、以下に『筑後市史』、『筑後松原郷土史』、『坂東寺史』から抜粋して坂東寺の歴史について概略を記しておく。



坂東寺一帯は広川荘であり、広川荘は平安末期に待賢門院を領家とし成り立ちと考えられ、その後、熊野山に寄進、領家とする大荘園として経営されていた。広川荘の荘域は凡そ707町、現在の筑後市北西部と広川町に跨る荘園である。延応元年（1239年）の熊野神社鳥居立注文写に「坂東寺」が見られ、13世紀以前には「坂東寺」が存在したことがうかがえる。また、天福2年（1234年）広川荘名田所役注文写にも「坂東寺」が見られ、記録上の初現資料となっている。

坂東寺は、広川荘が熊野山に寄進され、荘の鎮守社として熊野神社が勧請され、神宮寺として創建されと考えられる。したがって、坂東寺創建時期は、荘が熊野山に寄進された保延4年（1138年）、若しくは元弘4年（1334年）広川荘荘官連署状写に見える建長2年（1250年）頃であると推定されている。

元弘3年（1333年）には合戦により社殿が火災に遭い、文書等が焼失している。この合戦の経緯については詳細な記録がないため不明な点が多い。合戦は広川荘兼惣地頭である熊野山常住院の代官阿闍梨幸有と長床前刑部坊以下の人々の間に起こった合戦であるという。これは元弘4年（1334年）荘官等連署状写の中に、合戦により文書が焼失してしまったが、荘官らが写しをもっていたため、再写して各人が連署し、再度社頭に籠め置く旨が記されている。

天正12年（1584年）には戸次道雪、高橋紹運らが、坂東寺を焼き討ちし、住僧を西牟田で殺害したとの記録が『筑後国史』に記されているが、これらは江戸期の戦記であり、他の古い文書からの記述が認められないことから、史実であるかは不明である。これらを含め、戦国期には坂東寺だけでなく、寛元寺などの寺社が戦乱の中で翻弄される姿がうかがえる。坂東寺は戦国末期まで荒廃しており、福島城主筑紫広門により一度は再興したが、毛利秀包の入国後は寺の鐘樓、南大門、本坊、坊舎、寺田を没収され無住の寺として荒れていたとされる。再興するのは慶長6年（1601年）筑後国領主田中吉政の入国後のことである。田中吉政は入国直後に坂東寺に寺領の寄進を行い、これにより坂東寺は再興を果たすこととなる。

田中家断絶後、筑後国は矢部川を境に久留米藩と柳川藩に分割され、坂東寺は久留米藩有馬氏による支配となる。天保3年（1832年）9代藩主頼徳によって石造五重塔の東塔が持ち出されている。

明治になると、神仏分離により坂東寺は廃寺となり、明治12年に再興している。神仏分離により本尊である薬師如来像は羽犬塚宗岳寺、阿弥陀如来は願長寺、位牌は妙覚院へ預け渡した。明治19年に坂東寺再興の許可が降り、阿弥陀如来、位牌、不動明王、毘沙門天、閻魔大王、伝教大師像は返還されている。

#### 4. 坂東寺の歴史と調査所見

調査からは13世紀以降の遺構・遺物が確認されている。中でも坂東寺薬師堂を区画するとみられる溝や土塁を確認し、これらの遺構が坂東寺の歴史の中でどの位置に存在したかが問題となる。

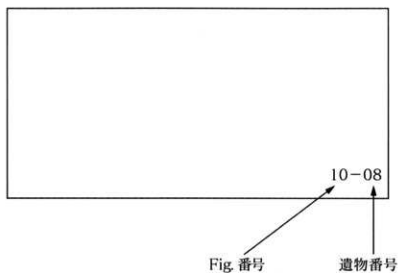
前述したとおり、五輪塔や宝塔が敷地内にあったとされる14世紀代は鎌倉末期から南北朝・室町期への変化の中にあり、元弘4年（1334年）に坂東寺も合戦により焼失している背景がある。当初、3次調査の墓地区の破壊、整地をこの時期に考えたが、整地遺物に中世後半から近世初頭の遺物が多数認められたため、この時期には該当しない。16世紀後半以降の整地とするならば、天正12年（1584年）の戸次・高橋による坂東寺焼き討ちがあったとされる時期以降となり、慶長6年（1601年）筑後国領主田中吉政入国による坂東寺再興時期に該当するのではないか。

したがって、3次調査溝の埋没及び整地、4次調査溝・土塁の造営については近世初期の所産であると考えられる。

# PLATE

## 凡例

遺物の写真右下の番号は、以下のとおりである。





Pl.1 調査区全景（真上から）



Pl.2 調査区全景（西から）



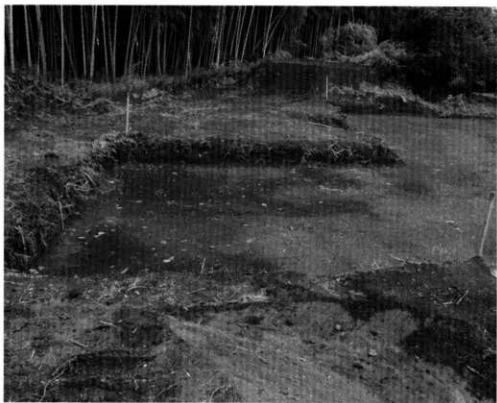
Pl.3 調査区南側から坂東寺境内を望む（北西から）



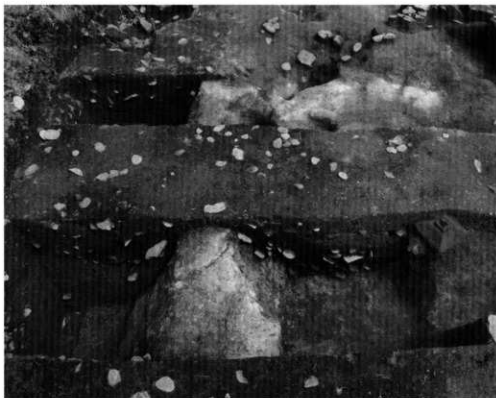
Pl.4 調査区西側から坂東寺住職墓地を望む（東から）



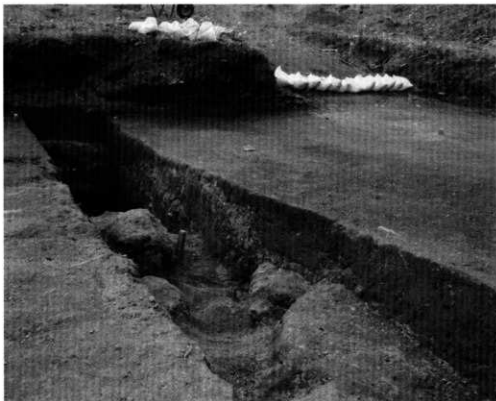
Pla.5 調査区表土剥ぎ (南東から)



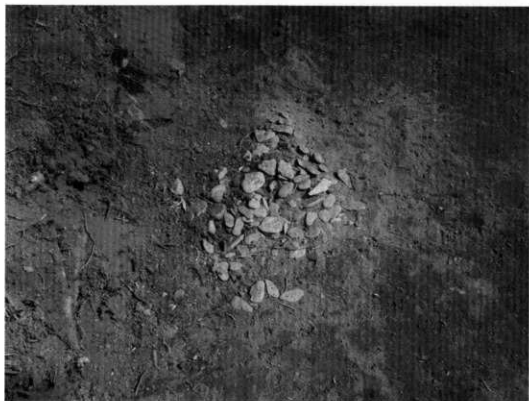
Pla.6 調査区北側検出状況 (西から)



Pl.7 3SD40・50 土層観察 (西から)



Pl.8 3SD060 北側トレンチ土層観察 (南東から)



Pla.9 3SK55 検出状況 (南から)



Pla.10 3SK55 検出状況 (南から)



Pla.11 3SK55 検出状況 (東から)

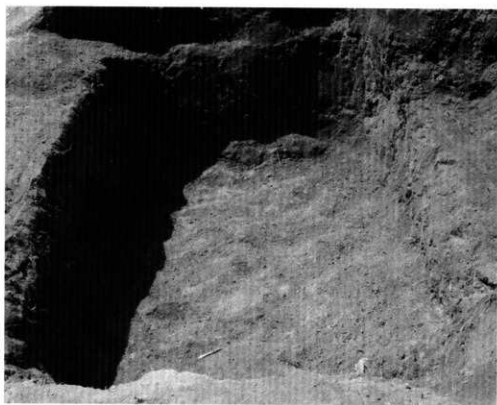


Pla.12 3SK55 検出状況 (北東から)

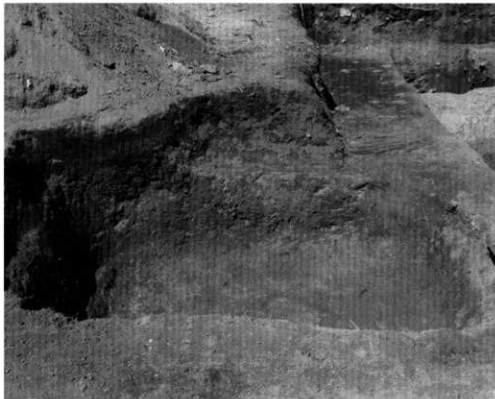




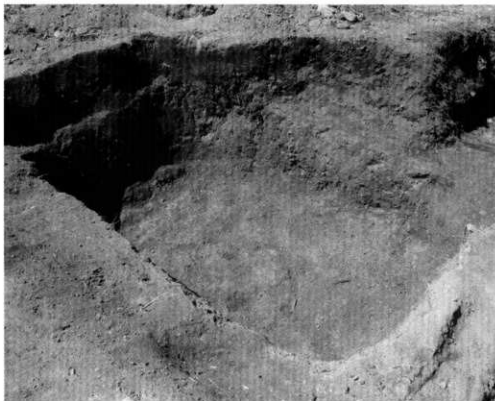
Pla.13 3SK55 検出状況 (東から)



Pla.14 3SK55 完掘状況 (東から)



Pla.15 3SK55 完掘状況 (南から)



Pla.16 3SK55 完掘状況 (南東から)



Pl.17 土塁 (西端部) 確認状況 (東から)



Pl.18 土塁 (中央部) 確認状況 (西から)



Pl.19 土塁（東部）確認状況（西から）



Pl.20 土塁（西部）確認状況（東から）



Pla.21 土塁（東端部）確認状況（東から）



Pla.22 土塁（東端部）確認状況（東から）



Pla.23 土塁（北東部）確認状況（西から）



Pla.24 土塁（東端部）確認状況（西から）



Pla.25 土塁 (南端部) 確認状況 (南から)



Pla.26 第1トレンチ全景 (南から)



Pla.27 第1トレンチ全景 (北から)



Pla.28 第2トレンチ全景 (南から)

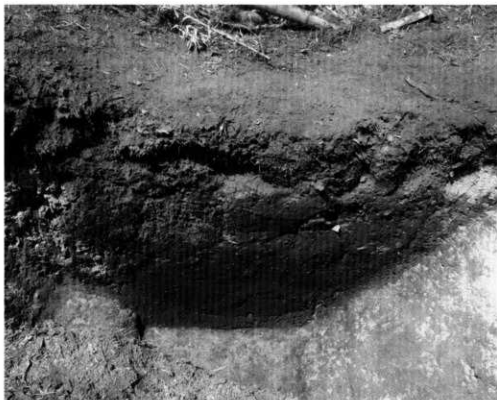




Pla.29 第1トレンチ土層確認1 (東から)



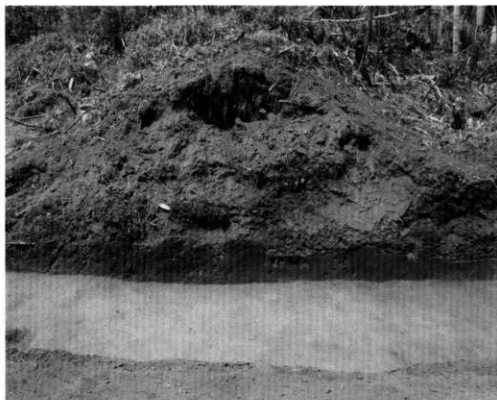
Pla.30 第1トレンチ土層確認2 (東から)



Pla.31 第1トレンチ土層確認3 (東から)



Pla.32 第1トレンチ土層確認4 (東から)



Pla.33 第1トレンチ土層確認5(東から)



Pla.34 第2トレンチ土層確認1(東から)



Pla.35 第2トレンチ土層確認2 (東から)



Pla.36 第2トレンチ土層確認3 (東から)



Pla.37 第2トレンチ土層確認4 (東から)



Pla.38 第2トレンチ土層確認5 (東から)



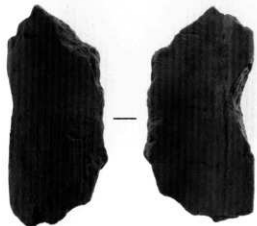
8-4



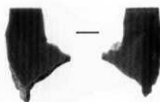
8-5



8-6



8-10



8-8



8-7



8-12



9-16



9-17



9-19



9-20



9-21



9-22



9-23



9-24



9-25



9-26



9-27



9-28



9-29



9-30



9-31



9-32



9-33



9-34



9-35



9-36



9-37



9-38



9-39



9-40



9-41



9-42



9-43



9-44



9-45



9-46



9-47



9-48



9-49



9-50



9-51



9-52



9-53



9-54



9-55



9-56



9-57



9-58



9-59



9-60



9-61



9-62



10-69



10-74



10-84



10-71



11-91



10-86



11-89



11-92



11-93



11-95



11-94



11-98





12-104



12-105



12-116



12-117



12-118



13-119



17-3



18-15



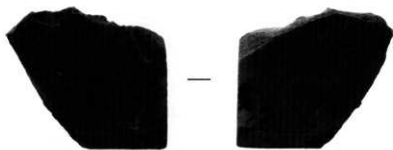
19-18



19-19



17-4



20-20



20-21



20-22



20-26

筑後市文化財調査報告書 第95集

**筑後市内遺跡群Ⅻ**

平成22年3月31日

発行 **筑後市教育委員会**  
福岡県筑後市大字山ノ井898  
TEL 0942-53-4111

印刷 **株式会社ディスジャパン**  
福岡県福岡市中央区大名1-9-30  
福岡観光ビル3F  
TEL 092-712-0431